

3月に入りました。日中は暖かさが増し、復活の丘のサクランボのつぼみも、膨らんできています。今週はレント第2週、主の受難を覚えつつ、過ごしましょう。

購い主キリスト

イースターまで、ヨハネの福音書を通して、イエス様がご自身を何者であると語られたかということを取りあげます。今朝は「私は良い羊飼いである」です。

羊飼い、と聞けばすぐに、いくつかの場面が思い浮かぶでしょう。クリスマスの場面、詩編 23 編、またイエス様が語った、迷子の羊の例え話などです。プロテスタント教会で用いられる「牧師」という呼び方も、羊飼いが語源です。しかし、イエス様は、ご自身を表されるときに、ただの羊飼いではなく、わざわざ「良い」という言葉をつけられました。「魅力的な」「美しい」という意味の言葉です。

その意味は、まず「羊のために命を捨てる」羊飼いなのだ、ということです。今朝の箇所では、5回も「命を捨てる」という言葉が使われています。それほどまでに、自分の羊を愛している、守ろうとする、という意味です。イースターに向かう季節は、伝統的に主の受難を心に覚える季節です。私たちの罪の身代わりとなって、苦しみを受け、十字架で死んでくださった姿は、命を捨てるという約束が、本当であったことを証明しています。

ただ、改めて考えてみると、ちょっと矛盾することもあるように思います。消防士の最大のルールは、「自分が生きて戻ること」です。もし、羊飼いが死んだら、残された羊はどうなるでしょう。却ってますます狼の餌食となってしまいます。

人間には、死に打ち勝つ力はありません。しかし、イエス様だけは、復活という奇跡を起こされた方でした。十字架の購いだけでなく、三日後に、墓からよみがえられて、恐れと悲しみに打ちのめされていた弟子たちの前に、現れてくださったのです。この永遠のいのちを与えてくださる方だからこそ、「良い羊飼い」なのです。

自分を映す鏡

ヨハネによる福音書は、誰が私を救ってくれるのか、という問いを持つ人に、明確な答えを与えてくれる福音書です。今朝の箇所も、「さまよう羊」と自覚する人には、ことさらにその恵みが感じられることでしょう。自分が何者であるか、ということは、自分が決めることでしょう。しかし、それを認めてくれる存在、お互いに応答してくれる相手がいれば、その認識はしっかりすると思います。

自らを、主の羊である、と感じ、その導く声に心の耳を澄ませる時、正しい道を開いてくださる方がおられることを体験する喜びは、何物にも替えがたい幸いです。私たちのために命を捨て、命を与えてくださる主の声に聞き従っていきましょう。